(一) 第865号 【昭和27年9月25日 第三種郵便物認可】 THE MIIKE (毎月1日、16日発行) 昭和44年3月1日(土)

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話 ③3033番 ③3034番
編集兼発行人 澁田紀生
年間600円 送料共

三池CO患者 遺族を守る会 ニュース
〈第七号〉

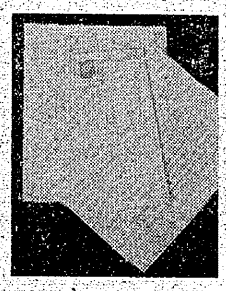
容認できぬ資本の犠牲

—東京の田中さんから三池に便り—

この手紙について

この手紙は「東京都日野市平山千七百七十四番地・東京光の家」に寄偶なさっている田中繁夫さんから、突然三池に寄せられてきたものです。

田中さんは、週刊朝日の二月十四日号に掲載された柴田翔さんのルポルタージュから、三池におけるCO問題のもつ深い真実に心うごかされて、このはげましをくださったもので、三池のよろこびはひとしおです。さっそく原文のままを全国の仲間のみなさんに、ご紹介いたします。



田中さんの便り

拝啓

立春を過ぎたとはいえ、寒さなお厳しい今日この頃です。週刊朝日(二月十四日号)グループ・ハワーの、柴田翔氏のルポ(CO問題についてのもの)で貫会の存在を知りました。

石炭産業についての知識は必ずしも十分なものではなく、ただ雑誌等で見聞するだけです。ただ過去において、石炭がエネルギー資源として〝黒いダイヤ〟ともてはやされたのに比べ、現実は非情なる資本の論理、まさに資本主義そのものによって、CO患者の人達が無惨な姿にさらされていることは事実であろうと思います。

その現実は決して生ま易しいものではなく、それは生活保護家庭の急増、少年非行化の問題等に現われていますが、これから先もますます厳しい道が続くことが予想されます。

昭和三十五年の三池大争議、それに続く爆発、相次ぐ事故は、不幸にも〝三池〟という名を不滅のものとしました。しかしそのことは、何の傷も負わない者にとって如何なる、大きな意味を持っていたでしょうか。ただ過去の出来事としか認識されないだろうし、いわゆる昭和元禄の風潮の中にあっ

犠牲者を無視して生産向上の意味なし

ては自分のみの今日、明日の生活しか頭にないのが、いつわりのない姿ではないでしょうか。

私は、知り合いが施設を運営している関係から、四年間救護施設に下宿し、大学に通学し、今春卒業の予定です。

施設に收容されている者とCO患者、あるいは炭鉱労仂者の置かれている現在の立場を同列に論ずることは、はなはだ失礼とは思いますが、お互いに政治の貧困故の何らかの犠牲の産物であるという点では、同類ではないかと思います。

社会主義、共産主義をもって論ずるまでもなく、また多くの例を持ちだすまでもなく、次期主力戦闘機(自衛隊用)の問題一つとり

あげてみても理解は十分です。防衛問題をぬきにして考えるなら(僕は非武装中立論者だが)、さまざまな圧力と不正によって、二十億円にも達するといわれる戦闘機の一機分の経費でも、なんとか別の方面に使うことはできないものかというのが、素朴な感情ではないでしょうか。

国民総生産が世界第二位、第三位と騒いでも、その裏で犠牲となっている人間を無視して何んの意味もない価値もないと思います。貧困相対説なるものもありますが、そんなものは容認できないことです。憲法を論ずるまでもなく権利は権利として当然主張されねばなりませんし、相手に義務を要求しなけ

経済万能主義——儲け第一主義のためには、如何なる不正手段も辞さない。これが資本主義の本質であるともいえましょう。

れば、炭労の動員に応じて結集された炭鉱労仂者は、これまで幾たびか政策転換闘争などでくり返された動員の場合と違って、こんどはあらゆる行動に気はくがみなぎっているという。

なかでも、北海道からやってきている労仂者や産炭地の地域住民代表の気組みはものすごく、炭鉱国有化問題に対する北海道の関心の高さをそのまま反映しているそうである。ヤマがつぶれれば私鉄がつぶれ、ひいては地域全体が運命を共にするというように、この問題は深刻な影響をひろげてゆくことがハッキリしてきたのである。

なければなりません。決して同情からでなく貫会の運動が勝利をおさめることを確信し、またそのことを祈りつつこの拙文を書いた次第です。各々その抱える問題は違っても不正、矛盾に対しては一緒になって闘い、頑張っていきたいと思います。さようなら。

おねがい

全国の仂く仲間のみなさん、今年も春闘がやってきました。全労仂者が生活と権利、反戦平和、とりわけいのちを守るための反合理化の闘いに決起しています。

みなさんの組合職場ではいかがですか。ぜひ三池に便りを下さい。仲間同志紙上交流を行ない、闘いをもりあげてゆきましょう。

—みいけ編集部—

ここで米ぬか油被害者たちが座りこんだ

(カネミ倉庫の正面の門)

「国有化するまで断じてひけぬ」

炭労の闘いはじまる

炭労指令にもとづく中央動員に応じて、三池労組からは去月二十四日、三十人の組合員が東京に向かった。すでに、中央で行動中。

こんどの動員で結集される勢力は炭労が二千人、それに産炭地からかけつけてきた部隊の一千人。この種の動員はこれからますます強化されるが、これは先の炭労大会が確立した〝国有化春闘方針〟にもとづくもので、「閉山・縮少の停止」「総合エネルギー政策を確立し、石炭の拡大生産をはかれ」「石炭産業をすみやかに国有化せよ」、そのほか労仂条件の向上、賃上げ(約二万円)などがその要求である。

中央動員は、国会での石炭政策が審議されるという重大な段階において、上記の要求の獲得をはかる上での一つの行動となっている。現在自民党政府が独占資本の指向する方向にもとづきおしすすめている石炭政策が、労仂者のためならず、地域や国民の上にはかり知ることのできない打撃を与えていることを思えば、要求は断じてつらぬかなければならない。

かってない気はくみなぎる

中央からもたらされた情報によれば、炭労の動員に応じて結集された炭鉱労仂者は、これまで幾たびか政策転換闘争などでくり返された動員の場合と違って、こんどはあらゆる行動に気はくがみなぎっているという。

なかでも、北海道からやってきている労仂者や産炭地の地域住民代表の気組みはものすごく、炭鉱国有化問題に対する北海道の関心の高さをそのまま反映しているそうである。ヤマがつぶれれば私鉄がつぶれ、ひいては地域全体が運命を共にするというように、この問題は深刻な影響をひろげてゆくことがハッキリしてきたのである。

CO患者、遺族を考えよ

また伝えられてきているところでは、こんどの中央動員に参加した三池労組代表の三十人は、労仂省や通産省、または三井本社など

にくりだしては「ビルド鉱ととかくうらやましがられている三池では、爆発後もひきつづき数多の労仂者が殺されており、CO患者や遺族が苦しい生き方を余儀なくされている。お前たちがいっぺん、オレたちの立場に立って見ろ。炭鉱国有化するとともに、保安対策を強め、CO患者・遺族の要求にこたえよ」とせまっているというもので、大牟田からは約三十人が行進に加わった。

行進団は屋良主席、平良那覇市長から「B52撤去、総合労仂布令撤回、真の国政参加」の要請文を託され、行進する各地方自治体にそれを手交しながらうったえつづけている。

四月二十八日東京到着の計画。

元気で大牟田通過

沖縄返還国民大行進

去る二十四日朝、その前日大牟田入りした〝沖縄返還要求国民大行進(日本山妙法寺の田島瑞泰さんを団長としている)〟が、次の柳川をめざして出発した。

行進団は去月九日沖縄県の那覇市を出発、十二日鹿児島に上陸、東京をめざして歩きつづけている

写真は出発に当って

核ぬきの沖縄はナットクできぬと

きさごろ東京で開かれた第二回日韓議員懇談会(日本側は自民党有志)は「核つきの沖縄返還」を強く主張したというが、いよいよ恐しくなってきた。

「誠意ある話合いせよ」と

ついに座り込み抗議

寒風ついて、米ぬか油症患者

昨年秋以来北九州市のカネミ倉庫(加藤三之輔社長)が発売した「ライスオイル」によって発生した油症患者は西日本各地で一万数千人にものぼった。

原因は製造元であるカネミ倉庫の設備の不良からであることが明らかになったが、全身に黒いブツブツができたり、黒い赤ちゃんを死産したりする被害者にたいしては何の補償もなされていない。

原因が明らかになった直後加藤社長が

「十分な補償をする」と語ったことなどまったく忘れさられている。

もとの体にかえせ

北九州市と田川地区の油症患者で組織する「カネミライスオイル被害者の会連絡協議会」(紙野柳蔵会長、六十七世帯、二百八人)は、ついに一月二十五日午前七時すぎから六十三人がカネミ倉庫正門前にすわりこみ会社側に誠意ある話し合いを要求した。

被害者の会は「この顔、この身体を元にかえせ」「われわれは内臓も侵されている」などとかいたノボリをたててすわりこみ、誠意ある話し合いを要求した。

同日は七時間のすわりこみののち一たん引き上げたが、会社側は「刑事責任があきらかにならないと話し合われない」などといい、一方、北九州衛生局は「どうしようもない」と無能ぶりを示している。傷つけられたまま放りだされている患者たちの闘いに支援をおくろう。

被害者の会連絡先=田川郡添田町桜町、紙野柳蔵さん宅)